

『源氏物語』における仏教関連用例

——「葵」「賢木」、「匂兵部卿」「紅梅」——

| | | | |
|---|---|---|----|
| 春 | 日 | 美 | 穂 |
| 小 | 菅 | あ | すか |
| 高 | 倉 | 明 | 樹子 |

はじめに

『源氏物語』は、平安時代中期に成立した物語文学である。当時の浄土思想の影響を受け、仏教にまつわる表現が多く見られる。『源氏物語』の仏教に関わる先行研究については、著書に限っても、重松信弘『源氏物語の仏教思想 仏教思想とその文芸的意義の研究』（平楽寺書店、1967）、丸山キヨ子『源氏物語の仏教 その宗教性の考察と源泉となる教説についての探究』（創文社、1985）、斎藤暁子『源氏物語の仏教と人間』（桜楓社、1989）、三角洋一『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、1996）、中井和子『源氏物語と仏教』（東方出版、1998）、日向一雅編『源氏物語と仏教』（青蘭舎、2009）、三角洋一『宇治十帖と仏教』（若草書房、2011）等があり多く積み重ねられている。

しかし、個々の用例に立ち返り、当時の仏教の実態も含めて、具体的にその場面や状況が解明されているかという視点にたったとき、明らかになっていないものもあるのではないか。

以上の視点から、『源氏物語』の仏教的な事項について新編日本古典文学全集で確認し、注とともに一覧とした。用例については、鈴木裕子氏他『源氏物語仏教関連表現データベース（β版）』（2005）ですでに調査が可能である。しかし、今回は注も掲出することにより、問題点や不明点、現状の研究状況を確認できるようにすることを意図している。もちろん、新編日本古

典文学全集の本文のみを対象としている点で問題は残る。しかし、まずは用例とその解釈を掲出し、問題点が発見されることで、新たな検討につながることを目指している。

凡例を後に示したが、基本的に「罪」「宿世」などの仏教的な概念についての用例は作品理解に重要だが、今回は具体的な実態や典拠があるものをまとめ、改めてそれらがいかなるものだったのかを考える一助とするため除外した。また、服喪に関する名詞については、基本的に実態がある程度明らかになっていると考え、除外した。

調査の分担としては、春日が全体の統括を行ったうえで、全集本2巻「葵」「賢木」を小菅、5巻「句兵部卿」「紅梅」を高倉が担当した。2巻、5巻ともに調査は既に終わっているが、紙面の都合上巻を限定した。

例

一、『源氏物語』の本文は、小学館刊新編日本古典文学全集により、巻名・頁数をふす。下線を適宜補っている。頁については本文の箇所を掲出している。なお、刷によって内容が異なる場合は、新しいものに従った。

一、段落を示していない箇所がある。

一、漢数字については適宜算用数字にした。

一、経典、仏教的な行いや行事などに関わるものについて掲出した。よって、以下の用例については掲出しなかった。

1、鈍色、青鈍など服喪に関する表現（服喪事態については掲出している）

2、仏、闍伽など仏像や仏具に関する表現

3、尼・法師・入道、阿闍梨、聖、本意など出家の状態やその志をあらわすもの（山の座主は固有の状態を表すため掲出した）

4、宿世・契り・罪・前の世など仏教的な概念に関するもの

5、鳥辺山、山寺など場所に関する呼称

なお、以上のものについても、実態のある仏教関連用例とともに出てくる場合は掲出している場合がある。また、その際は注も掲出している。

一、注の掲出は仏教に関する部分のみであり、掲出本文すべての注ではない。

一、本文や注は内容のまとまりによって掲出しているが、長いものについて

は適宜区切っている。

一、頭注が付録について指摘している場合は付録も掲出しているが、引用本文等が膨大である場合や、本文のみの指摘の場合については、省略した箇所がある。

一、ふりがなは省略した。

| | 新編全集該当箇所 | 場面説明 | 本文 | 頭注等 |
|---|-----------|--------------------|--|------------------------------------|
| 1 | 葵 31 ~ 32 | 懐妊中の葵の上、物の怪に悩まされる | さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、 <u>御修法</u> や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。 | ・御修法…物の怪の調伏、安産祈願のための加持祈禱。 |
| 2 | 葵 32 | 〃 | 物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなければ、また片時離るるをりもなきもの一つあり。いみじき <u>験者ども</u> にも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。 | ・験者ども…修験者。密教の秘法を行じて、加持祈禱の効果を現しうる僧。 |
| 3 | 葵 33 | 〃 | 院よりも御とぶらひ隙なく、 <u>御祈禱</u> のことまで思しよらせたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。 | |
| 4 | 〃 | 六条御息所、物思いから祈禱をする | かかる御もの思ひの乱れに御心地なほ例ならずのみ思さるれば、他所に渡りたまひて <u>御修法</u> などせさせたまふ。 | ・他所…齋宮の御所では仏法を忌むから。 |
| 5 | 葵 37 | 〃 | 九月には、やがて野宮に移ろひたまふべければ、二度の御祓のいそぎとり重ねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふを、宮人いみじき大事にて、 <u>御祈禱</u> などさまざま仕うまつる。 | |
| 6 | 葵 37 ~ 38 | 光源氏、六条御息所の物の怪と対面する | まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみたまへるに、にはかに御気色ありてなやみたまへば、いとどしき <u>御祈禱</u> 数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御物の怪一つさらに動かず、やむごとなき <u>験者ども</u> 、めづらかなりともて悩む。さすがにいみじう <u>調ぜられて</u> 、心苦しげに泣きわびて、 | ・調ぜられて…調伏されると物の怪は苦しんで正体を現す。 |

| | | | | |
|---|------|-------------|--|---|
| 7 | 葵 38 | 〃 | 加持の僧ども声静めて法華経を誦みたるいみじう尊し。 | ・声静めて…「ゆるべたまへや」を受けて、源氏と葵の上の対談中は、『陀羅尼』をやめて、『法華経』（『観世音普門品』であろう）を低声に読誦する。 |
| 8 | 葵 39 | 〃 | 「何ごとともいとかうな思し入れぞ。さりともしけしうはおはせじ。いかなりともかならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、 | ・逢ふ瀬…「瀬」は「所」「時」の意で、三つ瀬川（三途の川）の意をこめる。死後、三途の川で、女は初めて逢った男に背負われて渡るといふ。夫婦の縁は二世にわたるともいわれ、死別しても逢える。『地藏菩薩発心因縁十王経』による。→付録 509 頁。 【付録 509 頁】 日本人によって作られた經典である『地藏菩薩発心因縁十王経』を典拠とする。元來漢訳の『正法念経』によりつつも、日本の民間伝承に由来するところが多いという。 葬頭河ノ曲レル初メノ江ノ辺ニ於イテ、官庁相連ル所ヲ渡ル。前ノ大河ハ即チ是レ葬頭ニシテ、亡人ヲ渡スヲ見ル。奈河津ト名ヅク。渡ル所三ツ有り。一ニ山水ノ瀬、二ニ江深ノ淵、三ニ橋有リテ渡ル。官ノ前ニ大樹有リ、衣領ノ樹ト名ヅク。影ニ二鬼ヲ住マシム。一ハ奪衣婆ト名ヅケ、二ハ懸衣翁ト名ヅク。婆鬼ハ盜ノ業ヲ警メテ、両手ノ指ヲ折ル。翁ノ鬼ハ義無キヲ悪ミテ、頭足ヲ一所ニ還ル。尋イデ、初メテ聞セシ男ハ其ノ女人ヲ負ヒ、牛頭、鉄棒ヲ二人ノ肩ニ挟ミテ、追ヒテ疾瀬ヲ渡シ、悉ク樹下ニ集ム。婆鬼衣ヲ脱ギ、翁鬼ハ枝ニ懸ケテ、罪ノ低昂ヲ顯シ、後、王ノ庁ニ与フ。 源氏の言葉は傍線部によっている。三途川ではじめて契りを交した男女が逢うことは、『蜻蛉日記』や後の『とりかへばや物語』にも見える。 |
| 9 | 葵 41 | 葵の上、男子を出産する | 言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかでぬ。多くの人々の心を尽くしつる日ごろのなごりすこしうちやすみて、今はさりとともと思す。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは興あり、めづらしき御かしづきに、皆人ゆるべり。 | ・言ふ限りなき願ども…際限のないほどの立願。 ・山の座主…比叡山延暦寺の天台座主。こうした高僧を招き入れられる左大臣の権勢がしのばれる。 |

| | | | | |
|----|---------|-----------------------|--|---|
| 10 | 葵 42 | 葵の上の出産を聞き、六条御息所の苦惱深まる | あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣などもただ芥子の香にしみかへりたり。 | ・芥子の香…邪氣の修法の護摩を焚くときに芥子を油などとともに火中に焼く。その芥子の匂いが御衣にしみついているのは、自分の生霊が葵の上にとりついた証跡である。 |
| 11 | 葵 46 | 留守中に葵の上急逝する | ののしり騒ぐほど、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちもえ請じあへたまはず。 | |
| 12 | 葵 47 | 葵の上の葬送を行う | 人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまざまに残ることなく、かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて鳥辺野に率てたてまつるほど、いみじげなること多かり。 | ・いかめしきことども…蘇生の秘法の数々を施す。 ・日ごろ…後の御法巻によれば死亡は十四日、葬儀は後にあるように二十日過ぎである。 ・鳥辺野…火葬場のあった所。 |
| 13 | 葵 47～48 | 〃 | こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所どころの参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたまはず。「かかる齡の未に、若く盛りの子に後れたてまつりてもごよふこと」と恥ぢ泣きたまふを、こころの人悲しう見たてまつる。夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いとものはかなき御骸骨ばかりを御なごりにて、暁深く歸りたまふ。 | ・夜もすがらいみじうののしりつる儀式…遺体を焼くのに夜通しかかる。 |
| 14 | 葵 49 | 光源氏、葵の上の死去を哀悼する | 念誦したまへるさまいとどなまめかしきさまさりて、経忍びやかに読みたまひつつ、「法界三昧普賢大士」とうちたまへる、行ひ馴れたる法師よりはけなり。 | ・念誦…仏名、経文、呪文を韻律をともなった調子で唱えること。 ・法界三昧普賢大士…「大士」は菩薩の意。「法界三昧」は普賢菩薩の住する三昧境で、冠せて普賢の徳をたたえる。普賢は、文殊とともに毘盧遮那仏の脇侍(華嚴經)。 |
| 15 | 〃 | 〃 | 宮は沈み入りて、そのままに起き上がりたまはず、危げに見えたまふを、また思し騒ぎて御祈禱などせさせたまふ。はかなう過ぎゆけば、御法事のいそぎなどせさせたまふも、思しかげざりしことなれば、尽きせずいみじうなむ。 | ・御法事…故人の追善供養のために行う、七日七日の法事の支度。 |

| | | | | |
|----|---------|---------------------|---|--|
| 16 | 葵 50 | 〃 | 大將の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず、あはれに心深く思ひ嘆きて、 <u>行ひ</u> をまめにしたまひつつ明かし暮らしたまふ。 | ・行ひ…葵の上供養の勤行。 |
| 17 | 葵 50～51 | 〃 | 宿直の人々は近うめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたるかぎり選りさぶらはせたまふ。 <u>念仏</u> の暁方など忍びがたし。 | ・念仏…低声に『阿弥陀經』を誦する暁のころ。 |
| 18 | 葵 54 | 光源氏・三位中将・大宮 悲嘆する | <u>御法事</u> など過ぎぬれど、 <u>正日</u> まではなほ籠りおはす。 | ・御法事など…四十九日(七七日)の法事を繰り上げて行ったか。 ・正日…四十九日を正日と称した例と、一周忌当日を正日と称した例とがある。ここでは前者である。 |
| 19 | 葵 67 | 光源氏、桐壺院と藤壺のもとに参上する | 院へ参りたまへれば、「いとう面瘦せにけり。 <u>精進</u> にて日を経るげにや」と心苦しげに思しめして、御前にて物などまみらせたまひて、とやかくやと思しあつかひきこえさせたまへるさま、あはれにかたじけなし。 | ・精進…身を浄め、心をこめて勤行をすること。 |
| 20 | 賢木 98 | 桐壺院前御する | 中宮、大將殿などは、ましてすぐれてものも思しわかれず。 <u>後夕の御わざ</u> など、 <u>孝じ仕うまつりたまふ</u> さまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。去年今年とうちつづき、かかることを見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついでにも、まづ思し立たることはあれど、またさまさまの御経多かり。 | ・孝じ仕うまつりたまふ…「孝ず」は、ここでは、子として追善供養をする意。 ・思し立たるること…出家遁世すること。 ・御絆…「絆」は出家を邪魔だてるもの。藤壺・東宮・紫の上・夕霧などをさす。「絆」ゆえに遁世を留保するほかないとする発想が葵巻(50頁)以来繰り返される点に注意。「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」(古今・雑下物部吉名)を引いた表現か。 |
| 21 | 〃 | 〃 | <u>御四十九日</u> までは、女御、御息所たち、みな院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかてたまふ。 | |
| 22 | 賢木 103 | 紫の上の幸運 | 西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、 <u>故尼上の御祈りのしるし</u> と見たてまつる。 | |

| | | | | |
|----|------------|---------------|--|--|
| 23 | 〃 | 朝顔の姫君、齋院となる | 齋院は御服にておりみたまひにしかば、朝顔の姫君は、かほりにみたまひにき。 | |
| 24 | 賢木 105 | 光源氏、朧月夜と密会する | 五壇の御修法のはじめにてつしみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。 | ・五壇の御修法…帝や国家の重大事に行う修法。ここでの重大事が何かは不明。中央および東西南北の五つの壇を設け、各々不動・降三世・大威徳・軍荼利夜叉・金剛夜叉の明王を安置して祈禱する。 |
| 25 | 賢木 107 | 光源氏、藤壺の寝所へ近づく | わが身はさるものにて、春宮の御ためにかならずよからぬこと出で来なと思すに、いと恐ろしければ、御祈禱をさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、思しいたらぬことなくのがれたまふを、いかなるをりにかありけん、あさましうて近づき参りたまへり。 | ・御祈禱…藤壺は自分からも源氏を避けるべく努めているが、そのうえ神仏への祈願までする。なお、自分の恋心を静めようと神に祈誓する歌に「恋せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」(伊勢・六十五段)などとする。 |
| 26 | 賢木 116～117 | 光源氏、雲林院に参籠する | 雲林院に詣でたまへり。故母御息所の御兄弟の律師の籠りたまへる坊にて、法文など読み、行ひせむと思して、二三日おはするに、あはれなること多かり。紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、古里も忘れぬべく思さる。法師ばらの才あるかぎり召し出でて論議せさせて聞こしめさせたまふ。 | ・雲林院…京都市北区紫野にあった天台宗の寺院。もと淳和天皇の離宮で、後に仁明天皇の皇子常康親王が住いとしたのを、その出家後、僧正遍照が寺にしたという。 ・律師…僧正・僧都につく僧官。 ・坊…寺院の中の僧侶の住まう所。 ・論議…経文の義をめぐる論議。 |
| 27 | 賢木 117 | 〃 | 法師ばらの閻伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など折り散らしたるものはかなけれど、この方の営みは、この世もつれづれならず、後の世は頼もしげなり。さもあぢきなき身をもて悩むかな、など思いつづけたまふ。律師のいと尊き声にて、「念仏衆生撰取不捨」と、うちのべて行ひたまへるがいとらやましければ、なぞやと思しなるに、まづ姫君の心にかかりて、思ひ出でられたまふぞ、いとわろき心なるや。 | ・閻伽…仏に供える水。梵語 argha。 ・念仏衆生撰取不捨…『観無量寿経』の一節。阿弥陀如来は念仏する衆生を自分のもに撰取して捨てることがない、の意。→付録 511 頁。 【付録 511 頁】 『観無量寿経』の一節である。訓読すれば、 無量寿仏二八万四千ノ相有リ、一々ノ相ノ中ニ各八万四千ノ形ニ随フ好キコト有リ、一々ノ好キコトノ中ニ復八万四千ノ光明有リ、一々ノ光明ハ十方世界ヲ遍照シ、仏ヲ念ズル衆生ヲ撰取シテ捨テタマハズ。其ノ光ノ相好ノ及ブト化物トトモニ具サニハ説クベカラズ。但ダ当ニ徳想シテ心ヲシテ明カニ見シムベシ。 |

| | | | | |
|----|------------|------------------|--|---|
| 28 | 賢木 120 | 光源氏、雲林院を出て二条院に帰る | 六十巻といふ書讀みたまひ、おぼつかなき所どころ解かせなどしておはしますを、 <u>山寺</u> には、いみじき光行ひ出だしたてまつれりと、 <u>仏の御面目</u> ありと、あやしの法師ばらまで喜びあへり。 | ・六十巻といふ書…天台の根本義を説いた教典。『妙法蓮華經玄義』『妙法蓮華經文句』『摩訶止観』『法華玄義釈籤』『法華文句疏記』『止観輔行伝弘決』の全六十巻からなるので、天台六十巻と呼ばれる。 |
| 29 | 賢木 121 | 〃 | 人ひとりの御事思しやるが絆なれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦經いかめしうせさせたまふ。あるべきかぎり、上下の僧ども、そのわたりの山がつまで物賜び、尊きことの限りを尽くして出でたまふ。 | ・御誦經…經を誦誦することから転じて、誦經に対する布施、の意。 |
| 30 | 賢木 122 | 光源氏、藤壺に山の紅葉を贈る | 命婦のもとに、 入らせたまひにけるを、めづらしきことうけたまはるに、宮の間のことおぼつかなくなりはべりにければ、静心なく思ひたまへながら、 <u>行ひも勤めむ</u> など思ひ立ちはべりし日数を、心ならずやとてなん、日ごろになりはべりにける。 | ・行ひも勤めむ…仏道修行を決心した、その予定の日数を。 |
| 31 | 賢木 128 | 桐壺院の一周忌と御八講 | 中宮は、 <u>院の御はて</u> のことにうちつづき、 <u>御八講</u> のいそぎをさまさまに心づかひせさせたまひけり。霜月の朔日ごろ、 <u>御国忌</u> なるに雪いたう降りたり。 | ・院の御はて…服喪の終り。ここは桐壺院の一周忌。 ・御八講…法華八講会。『法華經』全八巻を八座に分けて講説する法会。一日に朝座夕座の二度、四日間連続で完了する。この法会は常に追善供養のためとは限らず、ここでは藤壺のひそかな心づもりがこめられているらしい。 ・御国忌…帝の命日。宮中では政務をやめて、畿内の諸寺で仏事を執り行う。 |
| 32 | 賢木 129～130 | 法華八講の果ての日、藤壺出家する | 十二月十余日ばかり、 <u>中宮の御八講</u> なり。いみじう尊し。日々供養せさせたまふ御經よりはじめ、 <u>玉の軸</u> 、 <u>羅の表紙</u> 、 <u>帙賣の飾り</u> も、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。 <u>仏の御飾り</u> 、 <u>花机の覆ひ</u> などまで、 <u>まことの極楽</u> 思ひやらる。 | ・御經…御八講の際に用意される『法華經』は、八軸の卷子本で、紺の地紙に金泥などで書写された豪華なもの。 ・玉の軸…宝玉で飾られた卷子の軸。 ・羅の表紙…「羅」は薄く織った絹の布で、紗や鉛の類。これを經卷の表紙とした。 ・帙賣…「帙賣」は、經卷などを包む帙。竹をすだれ状に編み、表を錦や綾で覆って緒を付けたもの。 ・花机…仏前に据えて經文や仏具を載せる机。脚に花形などが彫られている。 |

| | | | | |
|----|--------|---|---|---|
| 33 | 賢木 130 | 〃 | <p>初の日は先帝の御料、次の日は母後の御ため、またの日は院の御料、<u>五巻の日</u>なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまへは、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、<u>薪こる</u>ほどよりうちはじめ、同じういふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちもさまさまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意などなほ似るものなし。</p> | <p>・五巻の日…御八講三日目、『法華経』第五巻を講ずる日。この時代には「提婆達多品」などを含む第五巻が特に重んぜられて、この日は特別の儀式が行われる。 ・講師…經典を講説する僧。重要な五巻の日だけに厳選された僧である。 ・薪こる…薪の行道と呼ばれる儀式。行基作と伝えられる「法華経をわが得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」（拾遺・哀傷）を歌いながら、捧げ物をしたり薪を背負ったり水桶を持ったりして行道する。これは、王（仏の前世の姿）が仙人（提婆達多の前世の姿）から『法華経』の教えを受けた苦心談を語る「提婆達多品」に基づく。→付録 511 頁。 【付録 511 頁】 『法華経』提婆達多品に、国王であった行基が求法の時、「誰か大法有ル者ゾ、若シ我が為ニ解説セバ、身当ニ奴僕ト為ルベシ」と偈を説くと、提婆達多の前身である阿私仙が現れ、「我微妙ノ法有り。世間ニ希有ナル所ナリ。若シ能ク修行セバ、吾当ニ汝ガ為ニ説クベシ」と言う。以下、「時ニ王、仙ノ言ヲ聞キ、心大喜悅ヲ生ジ、即便チ仙人ニ随ヒテ須フル所ヲ供給シ、薪及ビ果蔬ヲ採リ、時ニ随ヒテ恭敬シテ与フ。情ニ妙法ヲ存スルガ故ニ、心身懈倦スルコト無シ」とある。行基が求法の為に、阿私仙に仕えて雑用に励んだという故事に基づく。なお、『拾遺集』哀傷、行基の歌「法華経をわが得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」は常夏巻に引かれ、「阿私仙」は鎌倉時代の『苔の衣』にも見える。 ・親王たちもさまさまの捧物ささげて…「御八講の時、諸卿捧物をみづから持ちて行道するなり」（巖江入楚）。</p> |
| 34 | 〃 | 〃 | <p>最終の日、わが御事を結願にて、<u>世を背きたまふよし</u>仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。兵部卿宮、大将の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかばのほどに、立ちて入りたまひぬ。</p> | <p>・最終の日…御八講の最終日。 ・結願…修法や立願をした最終の日の作法。</p> |

| | | | | |
|----|------------|---------------------|---|---|
| 35 | 賢木 130～131 | 〃 | <p>心強う思し立つさまをのたまひて、果つるほどに、<u>山の座主</u>召して、<u>忌むこと</u>受けたまふべきよしのたまはず。<u>御をちの横川の僧都</u>近う参りたまひて御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆずりてゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御気色にも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・山の座主…比叡山延暦寺を統括する最高の僧。天台座主。 ・忌むこと…受戒。仏門に入るに際して戒律を受けること。 ・御をちの横川の僧都…藤壺の母方の伯父（あるいは叔父）であろう。「横川」は比叡山延暦寺の三塔の一つで、根本中堂の北に位置する。慈覚大師円仁の開基になる。「僧都」は僧正に次ぐ僧位。 ・御髪おろし…さしあたり、背のあたりで髪を切りそろえる。 |
| 36 | 賢木 132 | 出家した藤壺の様子 | <p>風はげしう吹きふぶきて、御簾の内の匂ひ、いともの深き黒方にしみて、<u>名香</u>の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薫りあひ、めでたく、<u>極楽</u>思ひやらるる夜のさまなり。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・名香…仏前に供える薫香。 ・極楽…『往生要集』に「如意の妙香・塗香・抹香・無量の香、芬馥として遍く世界に満つ」。極楽世界は薫香に満ちていると想像された。下の「夜」を「世」とも解せるか。 |
| 37 | 賢木 134～135 | 寂寥たる新年の三条宮に光源氏が参上する | <p>年もかはりぬれば、内裏わたりはなやかに、内宴、踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、<u>御行</u>ひしめやかにしたまひつつ、<u>後の世</u>のことをのみ思ふに、頼もしく、むつかしかりしこと離れて思ほさる。常の<u>御念誦</u>堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて少し離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる<u>御行</u>ひせさせたまふ。</p> | |

| | | | | |
|----|------------|-----------|---|---|
| 38 | 賢木 135 | " | <p>ところせう参り集ひたまひし上達部など、道を避きつつひき過ぎて、むかひの大殿に集ひたまふを、かかるべきことなれど、あはれに思ざるに、千人にもかへつべき御さまにて、深く尋ね参りたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。</p> | <p>・千人にもかへつべき御さま…源氏を最大の味方として歓迎する気持。「疲兵再戦シ、一以て千二当ル」(文選・卷四十一・答蘇武書 李陵)。また『涅槃經』純陀品に大力士の強力につき「一人当千」とある。→付録 511 頁。【付録 511～512 頁】〔前略〕なお、「一人当千」の語は、『涅槃經』純陀品にも、大力士の強力の形容として見えているが、この条の、出家した藤壺のもとに源氏が訪れる場面にはふさわしくない。李陵と蘇武との故事は『蒙求』などを通じて平安人にもよく知られていた。『本朝文粹』卷三、大江以言の対策文に「蘇將軍」と「李都尉」を対句に用いており、『和漢朗詠集』卷下、鶴に、「答蘇武書」を引いた「李陵ガ胡ニ入リシニ同ジ、タダ異類ヲノミ見ル」の句がある。平安末にも、大江匡房の「詩境記」(『朝野群載』三、所載)『資実長兼両卿百番詩合』『泥之草再新』などにも「李陵」の文字がある。〔後略〕</p> |
| 39 | 賢木 136～137 | " | <p>ながめかるあまのすみかど見るからにまづしほたるる松が浦島 と聞こえたまへば、奥深うもあらず、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近き心地して、 ありし世のなごりだになき浦島に立ち寄る浪のめづらしきかな とのたまふもほの聞こゆれば、忍ぶれど涙ほろほるとこぼれたまひぬ。世を思ひすましたる<u>尼君たち</u>の見るらむも、はしたなければ、言少なにて出でたまひぬ。</p> | <p>・みな仏に譲りきこえたまへる御座所…仏壇を優先させた間取り。仏間に変えたことをいう。</p> |
| 40 | 賢木 138 | 藤壺、東宮への思い | <p>わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおほしまさばとのみ思しつつ、御行ひたゆみなく勤めさせたまふ。人知れずあやふくゆゆしう思ひ聞こえさせたまふことしあれば、我にその罪を軽めてゆるしたまへと<u>仏を念じきこえたまふ</u>に、よろづを慰めたまふ。</p> | <p>・その罪…不義の子とも知らぬ東宮が、それゆえに負うべき罪障。藤壺はそれを軽減すべく、身を捨てて仏道修行に専念する。そう思うと世間からの冷遇もさしてつらくはない。</p> |

| | | | | |
|----|------------|---------------------|---|--|
| 41 | 賢木 139～140 | 光源氏、行事を行う | 春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻塞などやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさをさしたまはず。 | ・春秋の御読経…宮中恒例の春秋の二回の読経会。ここは源氏が宮中行事をまねて自邸で行った。 |
| 42 | 賢木 143 | 朧月夜、病となり修法を行う | 瘡病に久しうなやみたまひて、まじなひなども心やすくせんとてなりけり。修法などはじめて、おこたりたまひぬれば、誰も誰もうれしう思すに、例のめづらしき隙なるをと、聞こえかはしたまひて、わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。 | |
| 43 | 賢木 145 | 光源氏、朧月夜と密会し右大臣に見つかる | 尚侍の君いとわびしう思されて、やをらみざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほなやましう思さるるにやと見たまひて、「など御気色の例ならぬ。物の怪などのむつかしきを。修法延べさすべかりけり」とのたまふに、 | ・修法…物の怪を追い出すための修法。 |

| | 新編全集該当箇所 | 場面説明 | 本文 | 頭注等 |
|---|----------|------------|---|--|
| 1 | 匂兵部卿 21 | 光源氏亡き後の六条院 | 天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世はただ <u>火を消ちたるやうに</u> 、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。 | ・火を消ちたるやうに→付録 512 頁。 【付録 512 頁】 『法華経』序品の末尾に、如来は会衆に向って最後の説教を終えると、今夜自分は涅槃に入ると宣して、その夜寂滅した。それに続く偈に「仏此ノ夜滅度ス。薪尽キ火滅スルガ如シ。諸ロノ舍利ヲ分布シテ無量ノ塔ヲ起ス」とある。→②付録 530 頁上段。 【②付録 530 頁上段】 頭注のほか、「薪尽キテ火滅ス」の文字は『日本後紀』弘仁二年六月六日の僧勝悟の示寂伝記にも見える。釈迦入滅の文字が『法華経』を介して平安初期には我が国でも用いられていたのである。なお「灯」も「火」もパリー語の原典では、同じく灯の意味だという。 |

| | | | | |
|---|---------|--------------------|---|--|
| 2 | 匂兵部卿 23 | 薫、自身の出生の秘密について苦悩する | 母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、月ごとの御念仏、年に二たびの御八講、をりをりの尊き御営みばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、 | <p>・月ごとの御念仏…この念仏は、僧を請じて、定期的に『阿彌陀經』を誦誦させる引声念仏の法会であろう。</p> <p>・御八講…法華八講。→賢木②128 頁注 12。</p> <p>【賢木②128 頁注 12】</p> <p>法華八講会。『法華經』全八巻を八座に分けて講説する法会。一日に朝座夕座の二度、四日間連続で完了する。この法会は常に追善供養のためとは限らず、ここでは藤壺のひそかな心づもりがこめられているらしい。</p> <p>・尊き御営み…仏事の御供養。</p> |
| 3 | 匂兵部卿 23 | ” | 「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。 <u>善巧太子のわが身に間ひけん悟りをも得てしがな</u> 」とぞ独りてたれたまひける。 | <p>・善巧太子のわが身に間ひけん悟り→付録 512 頁。</p> <p>【付録 512 頁】</p> <p>物語本文に問題があり、青表紙本はおおむね、この通りで、河内本は「瞿夷太子」である。高木宗監氏は『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻十五の末尾に、釈尊がその説法の結びに「善行王子ハ豈異人ナランヤ。即子我が身是ナリ」と言っていることによつて、右の「善行王子」は釈尊であり、物語の「善巧太子」は悉達多太子が実際に善巧の力があつたこともあつて、紫式部がそれにふさわしく、かつ物語らしく修正したものとされた。(後略)</p> |
| 4 | 匂兵部卿 24 | ” | おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ | <p>・問はまし…「問はまし」は、前に「わが身に間ひけん」とあるのをふまえる。「薫の一世の上を以て、無辺の生死の無始無終の道理を法文に顕はして云也」(岷江入楚、三光院実枝説)。</p> |

| | | | | |
|---|---------|---|---|---|
| 5 | 匂兵部卿 24 | ” | <p>明け暮れ勤めたまふやうなめれど、はかもなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはんことも難し、</p> | <p>・蓮の露→付録 513 頁。 【付録 513 頁】 明石② 245 頁注 17、若菜上④ 113 頁 10 行参照。『往生要集』大文第二・欣求浄土の第一に、「聖衆來迎」を説く中に、 善行の人の命の尽くる時は、地・水まづ去るが故に緩緩にして苦なし。〔中略〕時に大悲觀世音、百福莊嚴の手を申べ、<u>宝蓮の台を擧げて行者の前に至りたまひ、大勢至菩薩は無量の聖衆とともに、同時に讃嘆して手を授け、引接したまふ。</u>この時、行者、目のあたり自らこれを見て心中に歡喜し、心身安樂なること禪定に入るが如し。当に知るべし、<u>草庵に目を瞑づる時は便ちこれ蓮台に跏を結ぶ程なり。</u>とある。なお、「蓮の露」の語は、もと、『法華經』從地涌出品に「世間の法二染マザルコト蓮華ノ水ニ在ルガ如シ」とあり、『白氏文集』卷十五「放言五首」の中の「其一」の五・六句に、 草叢耀有レドモ終ニ火ニ非ズ 荷露團カナリト雖モ豈是レ珠ナランヤ とある。『古今集』夏、僧正遍照の、蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を珠とあざむくも、これらによるものという。こども『法華經』『白氏文集』双方に由来するものと見るべきか。 【明石② 245 頁注 17】 念仏の功深き行者は、その死に際して弥陀如来が聖衆とともに來迎し、行者は、觀音菩薩のささげる宝蓮の台に乗って極樂浄土に引接される（往生要集・大文第二・欣求浄土）。</p> |
|---|---------|---|---|---|

| | | | | |
|---|---|---|---|--|
| 6 | " | " | <p>五つの何がしもなほうしろめたきを、我、この御心地を、同じうは後の世をだに、と思ふ。かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすぼほれてや、など推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、</p> | <p>・五つの何がし…五障。→付録514頁・夕霧④417頁・④付録580頁。「さほりといはずしてなにがしとかける、余情たぐひなし」(細流抄)。 【付録514頁】 『河海抄』は『法華経』を引く。その「提婆達多品」に、文殊師利が娑竭羅竜女の娘が八歳で悟脱の境地に達した旨を語ると、智積菩薩がそのことを疑って、釈迦ですら難行苦行の末にようやく菩提を得たのであるから、女の身でそのように速やかに成仏するはずがないと難ずると、忽ち竜女が姿を現した。時に、舍利弗も竜女に向かって、「女人の身には猶五つの障りあり。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釈、三には魔王、四には輪転聖王、五には仏身なり。いかんぞ女身速やかに成仏することを得ん」と言った。竜女は、この時、一個の宝珠を仏に捧げ、仏はこれを受けた。竜女は「仏の力によって、自分がここで成仏するのを観よ」と言い、「忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して、すなわち南方の無垢世界に往き、宝蓮華に坐して、等正覺を成じ、三十二相・八十種好ありて、普く十方の一切衆生のために、妙法を演説するを見たり」とある。「」内は、岩波文庫本による) →④付録580頁上段。</p> |
|---|---|---|---|--|

| | | | |
|--|--|--|--|
| | | | <p>【④付録 580 頁上段】</p> <p>『法華経』提婆達多品に、舍利弗が、童女が無上道を得たことを疑って発する質問に、</p> <p>女身ハ垢穢ニシテ、是レ法器ニ非ズ。云何ゾ能ク無上ノ菩提ヲ得ン。…又、女人ノ身ハ猶ホ五障有り。一ニハ梵天王ト作ルヲ得ズ、二ニハ帝釈、三ニハ魔王、四ニハ輪転聖王、五ニハ仏身ナリ。云ハンヤ何ゾ、女身ニシテ速カニ成仏ヲ得ンヤ。</p> <p>とあり、さらに、童女は忽ち男子に変成し、衆生のために妙法を説いたとある。これが、女人を汚れたものとし、あるいは女人非成仏論の原点であるとされる。このことは、さらに他の経典、たとえば、『無量寿経』巻上に、</p> <p>モシ我仏トナルヲ得ンニ、十方無量不可思議諸仏世界ニ、其レ女人有りテ、我が名字ヲ聞キテ、歡喜信樂シ、菩提心ヲ發シテ女身ヲ厭ヒ惡マン。寿終ルノ後、復女像ト為ル者ハ正覺ヲ取ラジ。</p> <p>とし、また、『薬師瑠璃光如来本願功德経』の薬師瑠璃光如来の十二大願中の第八大願に、</p> <p>願ハクハ我が来世ニ菩提ヲ得ル時、若シ女人有りテ、女百惡ノ逼リ惱マス所ノ為ニ、極メテ厭離ヲ生ジ、女身ヲ捨テント願ハバ、我が名ヲ聞キテ、已ニ一切皆女ヲ転ジテ男ニ成ルコトヲ得、丈夫ノ相ヲ具ヘ、乃至無上ノ菩提ヲ証得セン。</p> <p>などともいう。〔後略〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なほ…出家の後の今でもやはり。 ・我…自分（薫）も出家して。 ・安からぬ思ひ…往生できず宙に迷っているのではないか、の意。→植木④ 291 頁・横笛④ [6] ・心づきて…来世で肉親にめぐり会うのは、出家を前提とした考え方。「薫一生涯此心あり。末々の巻にあまたみえたり」(岷江入楚)。 |
|--|--|--|--|

| | | | | |
|---|----------|---------------------|--|---|
| 7 | 匂兵部卿 26 | 薫の氣位の高さと身に備わる芳香 | つひにさるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことをも事なく過ぐしたまひて、後の世の御勤めもおくらかしたまはず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきてにこそありしか、この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたることよもなくなどぞものしたまふ。げに、さるべくて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、 <u>仮に宿れるかとも</u> 見ゆることぞひたまへり。 | ・後の世の御勤め…時期を誤らないで出家し、嵯峨院で仏道修行に専念したこと。 ・仮に宿れるかとも…「仏菩薩のしばらく託胎して人界に生ずる事をいふ也」(花鳥余情)。 |
| 8 | ” ” | ” ” | 香のかうばしきざ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。 | ・この世の匂ひならず→付録514頁。 【付録514頁】 『明星抄』に、「大品經二十七二十八ノ隨形好ニ云々、四十二ニハ毛孔ヨリ香氣ヲ出ス。四十三ニハ口ヨリ無上ノ香ヲ出ス云々」という。「隨形好」は仏の三十二の主たる特徴によって分たれた細かい八十の二次的特徴のこと。『聖徳太子伝略』上にも、太子が幼少のころ「其ノ身ヲ抱クニ及べバ、太ダ香シク世ノ奥トスル所ニ非ズ」とある。また「百歩」云々は尾崎左永子氏によれば、「百歩の方」といわれる薫香のことで、『薰集類抄』にいう「承和百歩香」をさし、仁明天皇の時代からの物かという。甲香・蘇合・占唐・白檀・零陵・藿香・甘松花・乳頭香・白膠・麝香・鬱金などを調合して作るという。 |
| 9 | 紅梅 39～40 | 按察使大納言と真木柱、その子たちのこと | 御子は、故北の方の御腹に、二人のみぞおはしければ、さうざうして、 <u>神仏に祈りて</u> 、今の御腹にぞ男君一人まうけたまへる。 | |

| | | | | |
|----|----------|--------------------------|---|---|
| 10 | 紅梅 48～49 | 紅梅、紅梅の花に託して 匂宮に意中を伝える | 「いかかはせん。昔の恋しき御形 見にはこの宮ばかりこそは。仏 の隠れたまひけむ御なごりには、 阿難が光放ちけんを、二たび出 でたまへるかと思ふさかしき聖 のありけるを。間にまどふはる け所に、聞こえをかさむかし」 とて、 | ・仏の隠れ～ありけるを→付録 515頁。 【付録 515頁】 『河海抄』以来、この出典は『大 智度論』とされてきたのである が、高木宗監氏は、それを誤り とし、出典は『増一阿含経』巻一、 序品第一を指摘する。すなわち、 釈師世二出テテ寿極メテ短シ 肉体漸クト雖モ法身在リ 〔中略〕 便チ光明ヲ奮ツテ顔色ヲ和シ 普ク衆生ヲ照ラスコト日初ノ 如シ おおむね従うべき説であろうが、 ただ物語本文の「二たび出でた まへるかと思ふさかしき聖のあ りけるを」に該当する人物は経 文では明らかでなく、一抹の不 安も残るか。 |
|----|----------|--------------------------|---|---|

おわりに

以上のまとめを概観すると次の点が課題として浮かび上がってくる。

- ①新編全集頭注や補注が掲出する経文などの仏教的事項が適切であるか。
- ②葵の上出産に関わる場面は主に「験者」が登場している。一方、藤壺を出家させるのは「山の座主」であるなど、様々な事例が混在している。
- ③『源氏物語』第一部世界と第三部世界とでは仏教的価値観が変容しているのではないか。

①については、大正新脩大藏経テキストデータベースや古注釈資料などを使用し、確認作業を進めていく予定である。

②については、平安時代初頭に密教が起こり、仏教自体がそれ以前と変容しているのと同時に、修験道や陰陽道などの影響も色濃く受けていることが、改めて理解される。今後は場面ごとに検証を深めていく予定である。

③については、匂宮にほとんど仏教的な事項の事例がないこと、俗聖としての八の宮の問題等、第三部特有の事例があると考えられるため、それらについても検証を行う。

凡例をもとに用例を掲出しているが、判断基準が一定になっていない箇所

等もあると考えられる。今後、残りの巻についても一覧にしていく予定であるため、ご叱正を賜りたい。

なお、本研究は JSPS 科研費 17K13394 の助成を受けたものである。